はじめに

日本においては、古代以来それぞれの時代に外国の文化を摂取して新たな生活が築かれてきたが、江戸時代の、とくに幕末においては、医学などを中心とする蘭学が日本の文化に少しずつ根づいてきた。大坂でも幾多の先学が蘭学をとりいれた。なかでも、医師緒方洪庵の開いた蘭学塾の適塾は多くの人材を育てて、日本近代化の大きな力となった。

大戸（緒方）郁蔵はその適塾に入り、洪庵と義兄弟となって緒方姓を名乗り、のち独立したが、本書ではその郁蔵の生涯を振り返ってみよう。その一生は明らかでないことも多いが、残された資料から彼の生き様をたどってみることとする。まず本書を手にとられた読者が、緒方郁蔵とはどういう人なのか最初に知っていただくため次にその概要を記しておこう。

緒方郁蔵（文化十一＝一八一四年～明治四＝一八七一年）は備中国簗瀬村で生まれた。名は郁、字は子文、俗称郁蔵、研堂は号、また独笑軒主人と号した。幼少にして山鳴大年に漢籍を学び、長じて江戸の昌谷精渓に漢学を学んだ。さらに江戸の坪井信道に蘭学を学んだが、父の命で帰郷して、自宅での勉学となった。天保九年（一八三八）同門の緒方洪庵が大坂で蘭学塾の適塾を開いたので、山鳴弘斎とともに入塾し、多くの医書を翻訳して適塾の発展に寄与した。弘化元年（一八四四）頃に開業し、蘭学塾・独笑軒塾を開いた。嘉永二年（一八四九）には洪庵らの始めた大坂の除痘館にボランティアとして参加して、翌嘉永三年、種痘書『散花錦嚢』を適適斎蔵板で刊行している。一方で、みずからの研究書『日新医事鈔』シリーズで二冊の出版を行い、続刊も企画されて

いた。

安政年間に入ると、大坂在住のまま、土佐藩から蘭書の翻訳や藩士の教育を依頼された。慶応二年（一八六六）、土佐藩が開成館を設け、郁蔵は医局の教頭に就任すべく土佐に赴いた。明治元年帰阪して大阪仮病院の設立に参加し、大阪医学校で翻訳に従事し、同四年（一八七一）に亡くなった。この時期に翻訳されたものはボードインの講義録『官版日講記聞』十一冊や、エルメレンスの講演録『開校説』である。

本年（平成二十六年）は緒方郁蔵生誕二百周年にあたり、そうした機縁もあって記念の出版をすることとなった。お目通しいただければ幸いである。なお、緒方郁蔵は明治二年（一八六九）、大学少博士に任ぜられ、正七位に叙せられたが、大正八年（一九一九）、没後五十年を記念して従五位の位階追贈を受けている。

肖像画について　緒方郁蔵の肖像画は本書カバーや図1～6（iv頁）にあるように、現在六点が知られている。最も早くその存在が広く認められたのは、日本医史学研究の第一人者・富士川游氏が明治二十九年（一八九六）発行の医学雑誌『中外医事新報』所収「緒方郁蔵先生」小伝中に掲載した模写像（図4）である。その末尾に次のようなことが書かれている。

備中ノ儒、坂（阪）谷朗廬撰フ所ノ墓誌ヲ見ルニ。先生ノ履歴性行紙上ニ躍出シ恍トシテ其人ヲ見ルガ如シ。乃チ仮字ヲ挿ミ、コヽニ之ヲ掲グ。伝中ニ挿メル像ハ緒方氏ノ家ニ秘蔵セラル、モノヲ借リテ摹セシナリ。謹テ緒方氏ノ厚意ヲ謝ス（明治二十九年三月一日富士川游記）

この追記によれば、明治二十九年（一八九六）現在、緒方家にはすでに郁蔵の肖像画が存在していて、それを摹（ぼ）すなわち模写あるいは素描したのである。

『贈位郷賢事績展覧会記念誌』（大正十三＝一九二四年刊）によれば、この展覧会に緒方郁蔵の三男・四郎氏が「独笑軒塾法附門生姓名」など七点を出品し、そのなかの一点に「緒方郁蔵写真」とあるので、富士川游氏閲覧の肖像画はこれを指すものと思われる。なお、これらの展示品のうち、「独笑軒塾法附門生姓名」は大正八年（一九一九）に行われた位階追贈関係資料のなかに複写されて残ったが、郁蔵写真をふくむ展示品のすべては第二次世界大戦中の大阪空襲のため焼失したとみられる。

現存する六点の肖像画（写真）のうち、現在緒方郁蔵の生家・大戸家の床の間に飾られている肖像画（図3）についてその由来を大戸家に問い合わせたところ、戦前に岡山で行われた皇御国展（すめらみくに）開催にさいして、事務局から何か出品して欲しいと頼まれ、当主・安（やす）氏が大戸家所蔵古写真（名刺の半分弱の大きさ／図1もしくは次に述べる図2）を使用して井原町（現：井原市）の今岡写真館に依頼して描かせたものであるという。この肖像画の作成法は古い写真を「エアブラシ」という写真修正術を使って描かせたもので、神戸などの専門業者に発注したと思われる（井原市の石井写真館・石井義浩氏のご教示による）。

大戸家にはもう一枚の肖像画（図2）がある。普段は図3の肖像画を収めた額縁のなかに収蔵されていてみることはできない。図2と図3を並べてみると、両者の元本は同一ではないかと思われる。図2は写真であって、左下角に「備中井原町井シイ」（現：石井写真館）の名がみえる。石井写真館は明治二十七年（一八九四）の創業と伝えられるので、本人を写したものとは思えないが、図1（今は痛みがひどいが）から作成したとも考えられる。図4（富士川游氏模写）も図1に準ずる写真（四郎氏宅のもの）で描かれた可能性がある。というのも、図1にある「故大学少博士正七位」の肩書きは明治二年に授与され、同四年に没するまでの間に撮影された写真であるが、「故」となっている理由は郁蔵が没した後に作成されたもので、当時は珍しかった写真が何かの

目　次

はじめに……i

第1章　生い立ち――誕生から適塾入門まで――

第1節　生い立ち――家族の動向と山鳴大年の漢学塾――……3
第2節　江戸における漢学塾・昌谷精渓塾と蘭学塾・坪井信道塾……7
第3節　郷里における蘭学修行――「ヅーフ・ハルマ字書」の筆写――……8
第4節　緒方郁蔵の適塾時代……10
第5節　養子問題と洪庵との義兄弟――緒方姓を名乗る――……12

第2章　独笑軒塾の開塾とその展開

第1節　独笑軒塾はいつできたか――年代・塾則・場所――……15
第2節　どんな人が入門したか――「門生姓名」五十音順検索――……22
第3節　除痘館事業に加わる……33
第4節　緒方郁蔵の医学研究――著書や写本からみて――……36
第5節　医は仁術――緒方郁蔵の書軸などからみた医学思想――……47

第6節　独笑軒塾時代の出来事からみた緒方郁蔵の人となり……52
第3章　土佐藩の医学・洋学研究と緒方郁蔵
第1節　大坂における土佐藩の仕事――安政の辞令――……60
第2節　土佐本藩勤務時代――慶応二～四年（明治元年）――……62
第4章　大阪医学校時代
第1節　明治天皇の行幸と病院建設……69
第2節　大阪仮病院（第一～二次）の開設……72
第3節　大阪府病院と大阪府医学校病院の開設……77
第4節　大名の診察……80
第5節　緒方郁蔵没後の緒方家――子どもたちと道平の家族――……82
第6節　緒方郁蔵をめぐる人たち……86
第5章　資　料
(1)「研堂緒方郁蔵先生伝」……98
(2)　研堂緒方先生碑……113
(3)　研堂緒方先生墓喝銘（大戸家所蔵一枚刷り碑文）……117

(4) 独笑軒記……119
(5) 独笑軒塾姓名録「門生姓名」……121
(6) 独笑軒塾則……127
(7) 緒方郁蔵関係書状……130
(8) 緒方少博士(郁蔵)回章……135
(9) 『開校説』……137
(10) 早春の旅　緒方研堂の郷村梁[簗]瀬他(嘉治隆一)……142
(11) 父祖の地をたずねて(緒方四十郎)……147
緒方郁蔵年譜……152
参考文献……159
あとがき
挿図一覧

第1章　生い立ち――誕生から適塾入門まで――

第1節　生い立ち――家族の動向と山鳴大年の漢学塾――

大戸（緒方）郁蔵は備中国後月（しつき）郡簗瀬村の出身であるが、同村は明治以降に近隣の町村と同じように合併を繰り返し、現在は岡山県井原市芳井町簗瀬となっている。明治二十二年芳水村簗瀬、同三十七年芳井村簗瀬、大正十三年芳井町簗瀬、平成十七年（二〇〇五）三月一日、井原市芳井町梁瀬となる。簗瀬の周囲はどんどん土地開発されて変わってきているが、大戸家とその周辺は現在もなお田舎の雰囲気が残るよいところである（図1）。大戸家の入り口には、「緒方研堂旧宅」の顕彰碑が建立されている（図2）。大戸家はもともと藤原姓であったが、宝暦五年（一七五五）、同じ備中国小田郡西大戸村（現：笠岡市内）から当時の備中文化の一中心地、簗瀬に移住し、そのとき大戸姓に改姓としたと伝えられる。

大戸（緒方）郁蔵は大戸万吉の長男として、文化十一年（一八一四）に生まれた。名は郁、字は子文、独笑軒・研堂はその号、通称が郁蔵である。大戸家の略系図を示した（図3）。大戸家は一男五女であったが、郁蔵は十四歳にして江戸に出たが故あって帰郷するなど行く末が決まらないままに歳月が経過して、後述のように、郁蔵二十五歳にして再度三都（大坂）に出たため、五女のすへ（すみ）が養子を迎えて跡を継いだ。以来今日ま

あとがき

学士入学した関西大学史学科を卒業して、仕事をしながら歴史研究の道をたどったため、最初の論文を書きあげるまでに十余年かかっていた。その論文が「緒方郁蔵と独笑軒塾」（昭和五十二年）だった。その後、研究の中心が大坂の除痘館研究に軸を移したこともあって、以後は折々に郁蔵について考える機会を持つこととなったが、平成二十三年（二〇一一）秋に、郁蔵の生家近くで講演をさせていただき、郁蔵伝記の執筆という気持ちが芽生え、平成二十五年（二〇一三）にいたって来年は緒方郁蔵生誕百周年となって重い腰をあげることになった。

本書にまとめた緒方郁蔵の生涯はまことに不十分なもので、読者が郁蔵をどの程度理解していただけるかに自信はない。しかし、混沌とする幕末の社会にあって、未来を見すえて医学研究に打ち込んだ郁蔵の姿から何かを感じとっていただけよう。時代の王道は歩まなかったが、時代を支え、その時代の証言者になり得るような、足元を見つめた日々の生活は現代においても生きる力を与えよう。

文久二年（一八六二）緒方洪庵が江戸へ赴任した後、郁蔵の往診に出かける輿（こし）が小さな輿から大輿に代わったと「郁蔵略伝」に記されている。それまで本家に遠慮していた郁蔵の姿が浮かびあがる。郁蔵にとつて、ここからが本当に自立したことになるのだろうか。慶応二年（一八六六）に出版した『内外新法』には郁蔵の医学研究にとりくむ姿が浮き彫りにされている。幕末と大坂医学校時代に執筆された二本の書軸にも医学へのとりくみが語られている（四二・四八頁参照）。真摯に生きた幕末

蘭方医の生き様を物語る。

二年間の土佐高知赴任はよき同志を得て、激動する土佐藩内の動向を肌で感じながらも邁進した。維新を迎えて、ボードインや、とくにエルメレンスの、西洋の医学を中心に最新科学を伝えようとする御雇い外国人に接して、血たぎる想いで日々仕事を進めたのではなかったか。一方で体調不良に見舞われ、悔しい思いもしたに違いない。しかし、洪庵亡き後、大阪の医界を支えた緒方郁蔵の存在は、あの『開校説』にみるエルメレンスの希望に満ちた言葉の翻訳に開花したのではなかろうか。

本書を出版するに当たり、大阪大学適塾記念センター、岡山県広報課、大洲市立博物館、先人顕彰会・井原、静嘉堂文庫、緒方洪庵記念財団、朝日新聞社、中央公論社、大戸家（大戸貴美江・大戸陽子両氏他）、緒方家（緒方一太郎・緒方四十郎・緒方紘一・緒方尚紘各氏他）、梅溪昇、水田紀久、米田該典、浅井允晶、園尾裕、片山純一、大島千鶴、石井義浩、山成遠平、山田広志、川上潤、福田舞子の各氏にお世話になった。記して御礼申しあげます。

また、思文閣出版の原宏一氏には大変お世話になりました。ありがとうございました。

平成二十六年八月六日　　著　者

◎著者略歴◎

古 西 義 麿（こにし　よしまろ）

昭和10年　兵庫県丹波市生
学歴：近畿大学理工学部（二部）・関西大学文学部史学科
　　文学博士（関西大学）
職歴：武田薬品工業・大阪市立図書館・大阪青山短期大学（現大阪青山大学／非常勤）
現職：除痘館記念資料室専門委員（緒方洪庵記念財団内）・橋本まちかど博物館長
著書：『鶴牧藩日記』（清文堂出版，1972年）『大坂医師番付集成』（思文閣出版，1985年）『緒方洪庵と大坂の除痘館』（東方出版，2002年）ほか論文多数
住所：堺市北区百舌鳥西之町1-98-2　陵南住宅2-402

緒方郁蔵伝（おがたいくぞうでん）——幕末蘭学者（ばくまつらんがくしゃ）の生涯（しょうがい）——

2014（平成26）年10月31日発行

定価：本体2,500円（税別）

著　者　古西義麿
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-751-1781（代表）

印　刷
製　本　株式会社 図書印刷 同朋舎

© Y.konishi
ISBN978-4-7842-1774-8　C1021